

ホリスティック ナーシングとは

Holistic Nursing

ホリスティックナーシング



Kikuyo Koitabashi

執筆／**小板橋喜久代**

京都橘大学看護学部 看護学科 教授

Yukari Kawahara

編集協力／**川原由佳里**

日本赤十字看護大学 基礎看護学 准教授

連載について

ホリスティックナーシングとは、身体・心・魂の統合された存在として人間をとらえ、看護することによって、人々の統合性をより高め、癒しをもたらすことを目的としている。

近年、医療費削減のため業務の効率化が叫ばれ、看護の標準化や危機管理が求められるなかで、病む人の療養場所であるべき病院がホスピタリティを見失いがちな現状がある。米国ではホリスティックナーシング協会が、環境を整え、癒しのコミュニケーションやケアを提供するホリスティックナースの認定を行っており、認

定ナースの実践によって患者の満足度が高まることが認められている。

この連載では、代替療法などの特別なテクニックを紹介するというのではなく、主に看護管理者が今の病棟でも提供できるような癒しの取り組みを紹介することを通じ、ホリスティックナーシングについて紹介していく。

医療や看護を取り巻く現状

ホリスティックナーシングについて考える前に、医療や看護を取り巻く現状について、筆者が気になる点を2つあげる。

まず一つは、効率化である。私たちは、効率的に仕事を進めるために、物事を分析し、実態を客観的かつ具体的に把握することが必要であると考え。しかしその裏で、知らず知らずのうちに失ってしまっている大切なものはないだろうか？ 特に人間と深くかかわる看護師の仕事には、文字にならないたくさんのことが含まれているが、それらを効率化の名の下に排除するのではなく、きちんととらえていくためには、どのようにアプローチをしていけばよいのだろうか。

もう一つは、技術に駆り立てられて仕事をしている姿である。『存在と時間』を著したドイツの哲学者ハイデッガー^{*1}は、「便利な科学技

^{*1}：マルティン・ハイデッガー（Martin Heidegger、1976年5月26日没、享年86歳）。ドイツの哲学者。その主著が未完のままの『存在と時間』。これはギリシャ哲学以降の西洋哲学の通念を覆し、存在の意味を問うたもので、最も難解な哲学書ともいわれる。

術が、人々を駆り立てる」と指摘し、「仕事場においても、個人の生活においても、新たな科学技術が開発されれば、人々は、その技術(産物)を購入するために働き、使いこなすために学び直し、使うことで新たなトラブルに遭遇し、まるでイタチごっこのように駆り立てられた生活を強いられていくのだ¹⁾」という。いつまでたっても満たされることがなく、ストレスと疲れが蓄積されていく現代人の姿そのものである。

こうした現象は個人の生活においても、医療の場においても表れてくる。人々は技術の進んだ医療サービスに過剰な期待を寄せ、満足することのない医療ニーズを投げかけてくる。

全体をとらえる(知る、あるいは感得する)ことの難しさ

私たちは、科学的な分析技術を手に入れたことで、対象を細分化し<要素>に注目した見方だけで、物事を理解できたと思ってしまうことが多いのではないだろうか。そうしたことに陥らないために、物事の本質をとらえる視点をもつことが必要である。

認知心理学の図地反転図形として有名な「ルビンの壺」(図1)は、だれもが一度は見たことがあると思う。図1でいえば、黒い部分を<図(要素)>と認識すると、白地は<地(場あるいは環境)>としてしか認識されず、逆も同様である。共通の境界をもつ2つの領域は、決して同時に両方を見ることができないことを示している。このように全体をすべてとらえることは難しいのである。

本稿ではその視点をもつためのスキルである、ホリスティックナーシングについて考えてみたい。筆者の所属している日本ホリスティックナーシング研究会(Japan Holistic Nursing



図1 ●ルビンの壺

出典／田中一彦, 長田久雄編: 新体系看護学全書 基礎科目 心理学, メディカルフレンド社, 2006, p.25.

Association: JHNA) (以下、研究会) はホリスティックナーシングを、「人間の存在を、からだ (body)・こころ (mind)・霊性 (spirit) を包括し、社会や自然環境との調和 (関係) のなかで生きている全体的=ホリスティックな存在としてとらえ、ケアする看護である²⁾」と定義している。

ここには重要なことが2点含まれている。一つは、「人間のとらえ方」の見直しである。現在は人間を分析し、要素に分断してとらえることが一般的であるが、研究会では、まずは丸ごと (全存在をあるがままに) とらえるという視点への見直しが必要だとし、そのうえでのホリスティックな技の探求を進めている。

もう一つは、とかく人間中心的な考えに陥ることによる近視眼的な見方を避けて、本当の生命のあり方を追求するために、人間を環境とのつながりのなかでとらえ直すという視点であ